

世阿弥の藝論研究の現在と将来

——文脈を読む力の見直しと基礎研究の充実を——

重田みち

世阿弥生誕六五〇年を昨年とするのは世阿弥の生年を貞治二年とする説に拠るが、今なお表章氏の貞治三年説も一定の説得力を持つと考える私は、今年も特別な年として、昨年に続いてもう一度、世阿弥の藝論研究を自身の経験をつまえて見わたしてみたい。

本誌の先月号で天野文雄氏は、生誕六〇〇年記念の年に較べ今回の六五〇周年に世阿弥特集の出版が少なかったことについて、とかく難解なものを敬遠する社会的風潮が世阿弥や能に対する研究面にも及んだことを挙げられた。たしかにそのとおりだが、たとえば『風姿花伝』はごく最近でも岩波文庫ベストテンにランクされることもあるロングセラーである。「難解」な古典を中心に比較したデータではあるが、依然として一般に、世阿弥に対する注目度は決して低くない。したがって、天野氏の述べられた五十年前との違いは、むしろ一般社会よりも学問研究に携わる側にあるという見かたも可能である。

それに関して、世阿弥の藝論研究に二十年

ほど取り組んできて実感するのは、その文章としての特性による難易度の高さであり、なんととっても読解に粘り強さと複雑さに耐える力を必須とすることである。六〇〇年も前の文献であるから、当時のことばや歴史的背景を学び考察する必要度の大きさは言うまでもないが、それに加え、世阿弥の藝論特有の難しさは、一つには昨年三月の本誌拙稿に述べたように世阿弥の教養が多様であること、そしてもう一つは世阿弥の藝論の書き進めかたと関係していると考ええる。

とくに『風姿花伝』『花鏡』のように義満時代からの着想や執筆に係る藝論は、私の考えるところ、主に義持時代に世阿弥が遭遇した逆境をきっかけとして大幅に書き替えられた。以前書いたものへの文の書き足し書き替えが、伝書全体の構成から篇、条々、語句に至るまでさまざまな規模で行われている。隣に並んでいても近い時期の論とはかぎらず、いつぼうもまったく離れた箇所、別の書に同時期の論が分散している。このような世阿弥の

藝論執筆の経緯や思想の展開を跡づけるには、物事を筋立てて考えることはもちろん、どこが書き替えてどこがそうでないかの大胆にして細密な検証をおした推定推測が必須条件となる。このような複雑な状態を一つ一つ解いていく文脈読解力を要する難易度の高さが、世阿弥の藝論にはある。

このように、着想から完成までに十年、二十年、もしくはそれ以上の年月がかかった世阿弥の文章は、したがって、たとえば原則的に一条一条を短時間に書き上げていく公的な日記や記録類とは異質である。記録類の読みには、記録ならではの文体や、その属する社会・共同体の用語・歴史背景の知識を必要とし決して易しくないが、文脈という点から見れば、短いまとまった文を切り取って読んでも大意がとらえられ、そこでその部分の読みが完結することも多い。いつぼう世阿弥の文章はそのような歴史学の基礎資料としての文献とはいわば文章のジャンルが異なるのであって、たとえ一部の文に限った考察にせよ、現存する世阿弥伝書をひととおり見わたしたうえで当該文の読み——執筆経緯や思想展開の考察を含む——を結論する気長さがなくては成り立ちがたい。世阿弥の文脈を読むことは、つまり、即答を出さずに何度となく「相手」に問いかけ、時には問題をひとまず寝かせて「相手」からの語りかけを待つことであると思う。

ただしこのようなことを今さら言うまでもなく、複雑に入り組んだ文脈を読むことこそ、文学的研究ならではの醍醐味であるはずであ

る。過去を顧みても、能勢朝次氏や表章氏の注釈、西尾実氏の考察など、世阿弥の藝論全体をいわば一つの大きな文脈にとらえ、常にそこに照らして部分を解釈するという基本がしつかりしている。世阿弥の藝論の書き替えを最初に指摘されたのは表氏であったが、その具体的な指摘以前から、ある箇所への解釈にそこから離れた箇所の関連説への目配りが行き届いており、また文脈に不自然な点を感じられる箇所に対する疑問を正直に表出され、問題提起されつつも結論を早まらなかった。表氏の校注『世阿弥 禅竹』の出版は一九七四年だが、世阿弥生誕六〇〇年記念の時点における右のような読みの在りかたが、質の高い校訂注釈として結実したのである。

このような世阿弥の藝論研究は、私の経験から言えば、実際、取り組み始めて二、三年ではとても論文執筆には至らず、少なくとも五年ほどの下積みを要する。その後も一一の説を発表するまでに着想から最低二、三年は猶予期間を置くほうがよく、その間に様々な角度から傍証を見出し想定しうる反証を検証する。現実には発表の分量に制限がありそれらを明示しきれない場合が多いけれども、検証や考察に基づいた確信があれば、後々それを補足することが可能である。また、複数の小テーマと同時並行して行えば、その間にテーマも育ち、視界が開けテーマ同士の連関もよく見え、より大きなテーマへと発展する。

先学を承け拙い考察を繰り返しつつも、これまでには私は、表氏が『風姿花伝』の前身と推測された『花伝』七篇すべてにわたって世阿弥

が書き替えや構成の再編を行い、最終的にはそれが『風姿花伝』と『花鏡』の二つの伝書に分けられ完成したと推測するに至っている。それとともに、世阿弥が身に付けた連歌論や禅、経学などの教養についても、自身の考察としては、全体にわたってある程度の見通しがついていた。このような段階で迎えた世阿弥生誕六五〇年の現在、世阿弥の藝論に関して私が行いたいことは、未公表の事柄も多いそれらの歴史的研究を次第に公表するとともに、文献の基礎的研究を充実させることである。

とくに、昨年三月の本誌の特集において述べた世阿弥藝論の現代語訳の前提として、その校訂注釈をあらためて行う時機が訪れつつあると考えている。表氏校注『世阿弥 禅竹』が出版されたのは能勢氏『世阿弥十六部集評釈』出版の三十五―四十年後であったが、今年はその表氏校注出版の四十周年でもある。その後の研究を集大成する意味においても、そろそろ新たな校注にとりかかってよい頃であろう。実際、『世阿弥 禅竹』出版以後、表氏ご自身、世阿弥の藝論書き替えについて先に述べた基本的かつ重要な指摘を行われ、またいっぽうでは世阿弥の文字遣いについて、詳細な調査に基づく考察を発表していられる。『世阿弥 禅竹』は優れた校注ではあるが、その後もそれを塗り替える研究が、表氏ご自身によっても進められたのである。最近の拙稿では、世阿弥の藝論の引用として、表氏のその後の説を参照した自身の新校訂を試みに載せた。これを『花伝』『風姿花伝』から始めて、ひととおり行いたいと考えている。

もう一つ、世阿弥の藝論の基礎的研究や歴史的研究を行うことの効用として、それが世阿弥や周辺の作品研究をさらに促すとの見通しを持っている。竹本幹夫氏や三宅晶子氏による以前の世阿弥の歌舞能を中心とした研究のほかにも、藝論を核として作品をとらえることの有用性を私自身感ずることは多く、すでに世阿弥の「老体」概念や「二志向」といった思想や美意識を軸に拙稿を少々公表している。しかも、世阿弥の能の作品は藝論以上にその制作時期が未詳のものが多く、比較的手掛かりの多い藝論の基礎的、歴史的研究を基盤とすれば、そのある程度の推定にも、これまで以上に参考に供しうるかと考える。

さらに、欧米を中心として国際的にも世阿弥に注目する人は少なくなく、今後もさまざまな角度からの研究が期待されるが、評価の高い英文の概説書を読んでも、また欧米滞在の私自身の経験から見ても、国際的にはここ数十年の日本の基礎的研究の成果が十分に伝達するには至っていない実情がうかがわれる。資料伝存の点からもこれまでの研究の蓄積からも、日本の環境を最大限に活かしようのが文献の基礎的研究であり、その地盤を築くという意味においても、今こそそのような研究を行い発信すべき時ではなからうか。

世阿弥生誕六五〇周年記念は、この二年間に何らかの成果を期待するばかりでなく、これまでを顧みて今後へと継いでいく節目に当たる年であると、私は認識している。

(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)